

千葉南高校 保健室だより

令和2年度 第4号

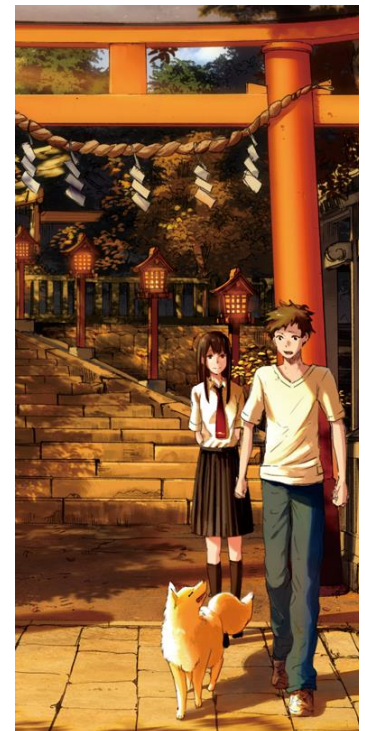
今回の保健室だよりは、ゲストさんからの投稿を掲載します。文は国語科の山中悦子先生です。

『神様の御用人』 浅葉なつ・著 メディアワークス文庫

神様をこんなに身近に、そして大切な存在に感じたことはない！
この本はいわゆるライトノベルで読みやすいのはもちろんですが、主人公で神様の御用人（助っ人、パシリ？）となる良彦や、良彦を指導する方位神の黄金（こがね）などのキャラクターが魅力的です。そして、それぞれ事情を抱えて良彦の前に現れる神様たちがまた愛すべき存在なのです。「一言主大神」「少彦名神」などのなじみの薄い神様たちから、「大国主神」や「須佐之男命」といった大物の神様まで次々と登場し、現代社会の中で、神様たちの存在意義がゆらぐような不安を語り出し、それに良彦が精一杯向き合っ、答え(?)を出そうと奮闘する、そういう小説です。

読んでみると、日本という国が神様と、どう付き合ってきたのかを考えさせられます。八百万の神という言い方がありますが、日本では人格化された神も含め、この世界の自然現象、動植物、様々なものを「神」として祀って来ました。私たちは神という漠然とした存在を心のどこかに感じて、祈ったり、畏れたり、救われたりしてきました。私たちは神様に祈ることで心の平安を得て、神々はそのような私たちの神様への思いによって存在している。神様と人とは相互にその存在を必要としているのではないかということに気づかされます。

この機会に是非読んで、神々に思いを馳せてみてください。ちょっと気持ちが穏やかになりますよ。



1 学年教育相談係 山中悦子

保健室からの本のご紹介 ～「ぼさぼさ」 絵と文 松本えつを サンクチュアリ出版

「かっこよく生きるってどういうことだろう。僕たちはいつだってそんなことばかり考えていた。」こんな文章から始まる「ぼさぼさ」。何かみんなにとって面白い本はないかな？と、うちの蔵書を探索していたら、この本が出てきたよ。改めて読んでみたら、今の南高生にもじっくりくんなああって思ったので、ご紹介します。「ちこら」という猫ちゃんが



高校生だったときのことをお話してくれます。

…影は、尊いものです。本当の愛情とはこういうものだ…なんて言えるほど、私はまだまだ大人ではないけれど、少なくとも私は、何かを大切に思うとき、その何かの陽のあたる部分と影の部分の両方を見て、両方を大切に思っていることを伝えてあげたいと思っています。一度しか会えなかった彼女に、同時に同じような苦しみを抱えているであろうすべての人に、そして周りの「本当の仲間たち」に。(著者あとがきより)